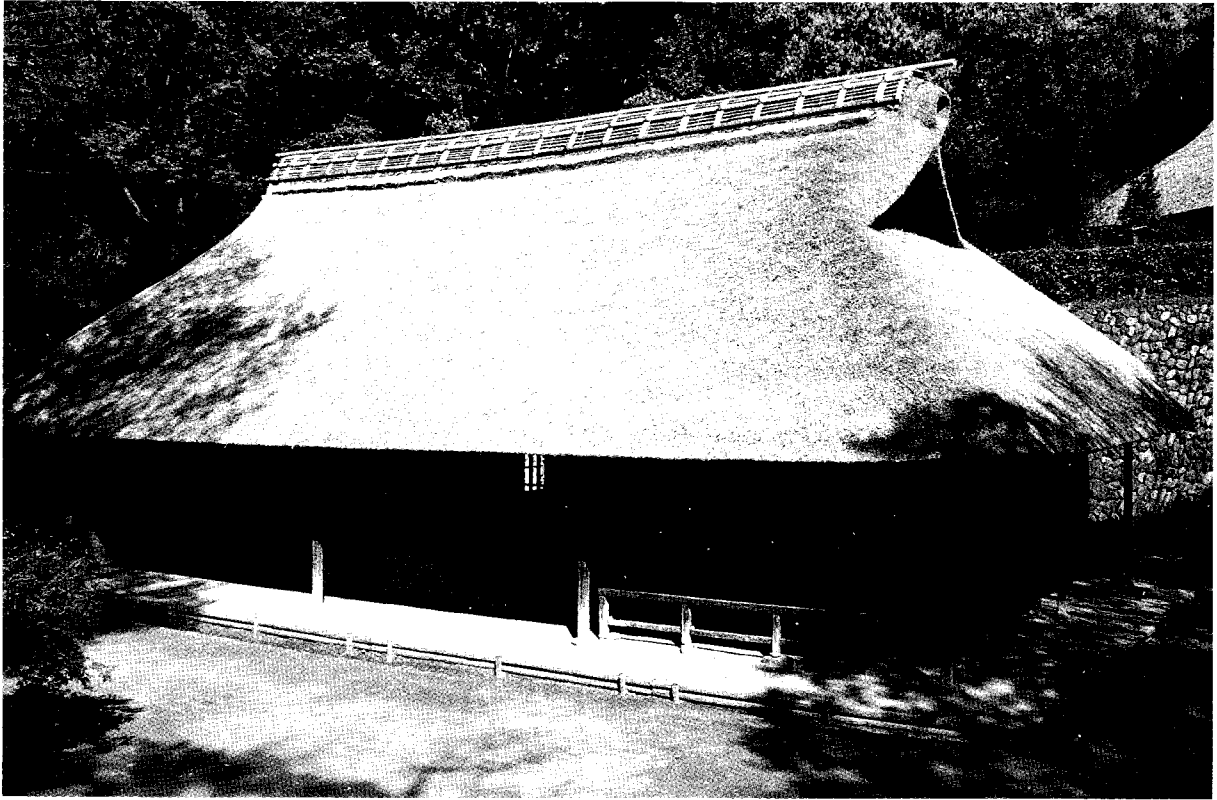


日本民家園だより

第49号

平成14年3月31日

編集・発行 川崎市立日本民家園



茅を新しく葺き替えた旧伊藤家住宅

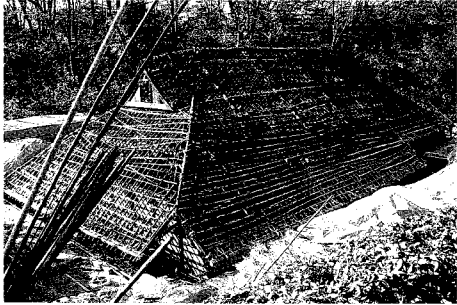
旧伊藤家住宅 保存修理工事完了

このたび、平成13年12月から行っていた旧伊藤家住宅の保存修理工事が完了しました。真新しい茅葺きの屋根が新緑に映え、趣深い雰囲気をかもし出しています。

旧伊藤家住宅保存修理工事終了

旧伊藤家住宅はもともと川崎市麻生区^{かなほど}金程に所在し、1965（昭和40）年日本民家園に最初に移築された記念すべき古民家です。川崎市内はもとより、神奈川県周辺地域における古民家の変遷などを考える上でも非常に貴重な民家として、国の重要文化財に指定されています。

今回の保存修理工事では、茅葺き屋根を全面葺き替えしたのをはじめ、一部傷みの激しかった土壁を塗り直し、さらに床板なども補強修理を行い、大変美しい姿になりました。



修理途中の伊藤家住宅

民家園内の古民家は、私たちの文化を知る上で非常に貴重な文化財です。しかし、それらを永く保存していくためには大変な労力が必要となります。現在では、茅葺き屋根を修理できる屋根職人は川崎周辺ではほとんどいなくなってしまい、茅などの材料の確保等が難しくなっています。これらの課題

はありますが、日本民家園は古民家等の保存・活用をとおして、これからもわが国の伝統文化を理解して頂く努力をしてみたいと思います。

民家園ウォッチング①

鈴木家住宅の揚戸（あげど）

民家園は、古民家を中心にした野外博物館であり、広大な敷地の中に合計25件の文化財建造物があります。そのため全てを十分堪能してもらうことが難しいと思います。そこで、園内に展示されている建物をもっと知ってもらうために、見所紹介をしていこうと思います。初回は宿場の村にある鈴木家住宅の見所を紹介したいと思います。

鈴木家住宅は福島県福島市にあった馬を扱う商人を泊めた馬宿であり、19世紀前半の建物です。この家の見所は、正面大戸口横に備え付けられている「揚戸（あげど）」です。この揚戸は今でいうところの雨戸のようなものですが、雨



揚戸を上げた状況



揚戸を下ろした状況

戸が横引きで戸袋などにしまうのに対して、揚戸は収納場所が上であり、戸を全て上げてしまうことで正面間口を最大限利用しようとしたものでした。

開園中は揚戸が収納されており、土間からしか見ることができませんが、生活や仕事の中で少しでも空間を有効にしようと努力してきた先人達の工夫を感じることができると思います。

平成14年 春の催物案内

はた織り

6月2日・9日・16日(各日曜3回連続)

さき織りのテーブルセンター(ランチマット)を作ります。

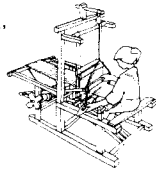
10:00~15:00 原家にて

料金 2200円(教材費込み)

定員 20人(3回とも参加できる人、
中学生以上)

往復ハガキで5/20(月)

締切必着



藍染体験

5月3日(金・祝)

本藍でハンカチを染めます。

11:00~15:00 作田家にて

※雨天の場合は5/4になります。

料金 500円(入園料別) 当日参加自由

協力(財)川崎市公園緑地協会

竹細工「菱四つ目かご」

6月23日(日)

菱四つ目編みのかごを作ります。

10:00~15:00 作田家にて

料金 1200円(教材費込み)

定員 20人(小学校4年生以上)

往復ハガキで6/10(月)

締切必着



民具着用体験コーナー

5月5日(日・祝)

ぞうり、わらじなどの子ども向け体験コーナーです。

11:00~15:00 作田家にて

※天候等で変更になることがあります。

料金 無料(入園料別) 当日参加自由

協力 民具製作技術保存会



お茶席の会

4月28日・5月26日(日)

古民家を鑑賞しながら抹茶をお楽しみください。

11:00~ 佐々木家にて

先着 100名

一服 300円(和菓子付き)(入園料別)

協力 4/28橘樹青年部・5/26所社中



農村歌舞伎公演

5月12日(日)

絵本太功記 十段目 尼ヶ崎閑居の場

絵本太功記 十三段目 山崎合戦の場

小栗栖の場

秋川歌舞伎あきる野座(東京都指定無形民俗文化財)

13:30~15:30 船越の舞台にて

定員 300人(当日先着順・開演1時間前から会場にて受付)

料金 500円(入園料別)

※ 体験学習講座のお申し込み方法

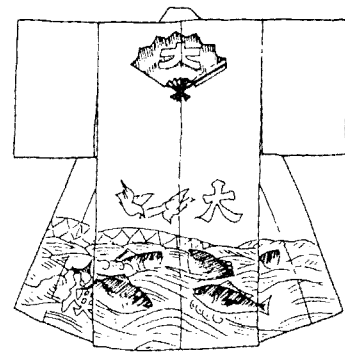
往復ハガキ(1人につき1枚)には「住所・氏名・電話・講座名・開催日・小~高校生は学年」をご記入のうえお申し込み下さい。

～ 万祝 (まいわい) ～

合掌造りの家々を抜けると、そこに千葉県山武郡九十九里町にあった作田家住宅が見えてきます。作田家住宅は家族が居住する主屋と、作業場としての土間がそれぞれが独立した屋根を設ける分棟型と呼ばれる様式の古民家で、その主屋の梁組は自然木の曲線を巧みに組み合わせており、それがリズムカルで美しい造形を奏でています。今回紹介する「万祝 (まいわい)」は、作田家住宅を日本民家園に移築する際に寄贈されたものです。

かつて、漁をして大漁であった時、船主 (網元) が船乗り (船方) や船大工など漁の関係者を招いて大漁祝いの祝宴を催し、その席で紺地に鶴や亀、松竹梅などの模様を染めた、極彩色の長半纏を祝い着として関係者に贈っていました。「万祝 (まいわい)」とは、最初「大漁祝い」や「大漁祝いの祝宴」のことを指していましたが、後に大漁の祝宴で配られるこの極彩色の「祝い着」のことを意味するようになりました。「まいわい」の「ま」は、「まがいい=運・巡り合わせが良い」の「ま (間)」であると考えられ、本来は「間祝」になりますが、縁起を担いで「万祝」と表記するのが一般的です。万祝を作ることができる程の大漁に恵まれる船はそう多くなかったので、万祝はまさに海の男・漁師たちの勲章と言えました。そして、正月の仕事始めや祝い事などのハレの日に全員がそろって万祝を身に着けて、さっそうと闊歩したと言われていました。

万祝は千葉県のある房総半島がその発祥地と考えられています。17世紀頃、木綿の衣服が重宝されるようになり、全国的に木綿の栽培が盛んになったのに伴い、木綿を染める藍の生産も盛んになりました。その肥料として、鰯 (いわし) を原料とする干鰯 (ほしか) や搾粕 (しめかす) の需要が増大しました。そのため多くの鰯が必要となり、こうした社会的背景の中で房総半島では鰯漁が盛んに行われ、一大鰯漁業地域として栄えました。また房総半島は、江戸幕府によって海陸の交通網が整備されたことにより、江戸との交流が盛んになり、お互いの文化が混ざり合い新しい文化が形成されていきました。その流れの中で、万祝が生まれたものと考えられています。現在の所、千葉県飯沼村の「浦方取締書」(文化8(1811)年)が「万祝」という言葉の初見と考えられており、少なくともこれ以前から房総半島では万祝の風習が行われていたと考えられます。万祝は、作田家のものも含め房総半島に広く分布していますが、その他伊豆・小田原地方やいわき地方、そして三陸地方にも分布しています。これは江戸時代の中期以降、鰯の需要が房総半島の鰯漁だけでは満たしきれなくなり、鰯の仲買人が新たな漁場を求めて各地に出向くようになると共に、万祝の習慣も広まったためと思われます。ただし万祝も地域色があり、特に房総半島からいわき地方までのものと、三陸地方のものとは非常に異なっています。前者は「マイワイ」と呼ばれ紺地に模様が染められていますが、後者は地に格子が入っており「カンバン」や「大漁バンテン」などと呼ばれています。



日本民家園の万祝 (作田家住宅)

この万祝は、江戸時代から昭和初期まで盛んに作られました。第2次世界大戦前後のしばらくの間は、物資の不足と華やかな模様の禁止・自粛のために万祝の製作はもちろん、人々に着られることもなくなりました。しかし戦後社会情勢や景気が回復すると、再び万祝が作られるようになりました。長くは続かず、昭和30年前後(1955年頃)には万祝を贈る、または着るということがほとんどなくなりました。

この万祝は、江戸時代から昭和初期まで盛んに作られました。第2次世界大戦前後のしばらくの間は、物資の不足と華やかな模様の禁止・自粛のために万祝の製作はもちろん、人々に着られることもなくなりました。しかし戦後社会情勢や景気が回復すると、再び万祝が作られるようになりました。長くは続かず、昭和30年前後(1955年頃)には万祝を贈る、または着るということがほとんどなくなりました。

下記の期間、作田家住宅で展示する万祝は、かつて隆盛を誇った房総半島の鰯漁の様子を今に伝える貴重な資料と言えます。是非日本民家園を訪れて、作田家住宅とともにご覧になっていただければと思います。

(※) 平成14年度の展示は、平成14年4～6月と、9～11月です。

(学芸員 栗田一生)